

日本計画行政学会第33回全国大会
セクション「まちづくり・参加Ⅲ」

ジオパークによるまちづくりの展開 ～アポイ岳ジオパークの取組みを中心に～

2010年9月10、11日の2日間、札幌大学で日本計画行政学会第33回全国大会が開催されました。大会テーマは「人口減少時代をこえて」。人口減少は近未来においてはすでに不可避のものであるという認識を共有した上で、それを乗り越えるアカデミズムや政策プログラム展開を訴求していくことが重要という思潮が根底にあります。

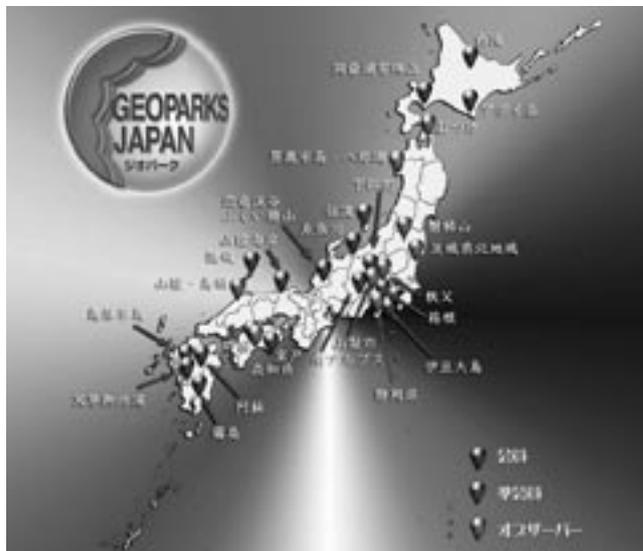
このなかでは、国土開発や地域政策のあり方などに関してさまざまな議論や発表がなされましたが、そのなかで、現在、日本において大きな広がりを見せつつある「ジオパーク」に取り組んでいる道内3地域の発表がありました。一つは、道内有数の観光地で世界ジオパークに認定された洞爺湖有珠山ジオパーク（壮瞥町・伊達市・洞爺湖町・豊浦町）。世界有数の活火山を有し、2000年の噴火後、火山との共生をテーマとしたエコミュージアムに取り組んできた地域です。二つ目は、世界的規模の黒曜石原産地で、旧石器時代の遺跡も多く出土している白滝ジオパーク（遠軽町）。今年9月に日本ジオパークに認定されました。三つ目が、JR日高本線の終着で、高山植物で有名なアポイ岳を有する様似町のアポイ岳ジオパーク。学術的に極めて貴重なかんらん岩などを有し、08年に日本ジオパークに認定されています。

ここでは、ジオパークとは何か、ジオパークで何を目指すのかなどについて、アポイ岳ジオパークの取組みから紹介します。

ジオパークとは

「ジオパーク」は、学術的に貴重な地質遺産を保全し、地球科学教育や観光に活用することを目的としたもので、2004年にユネスコの支援の下で設立された世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network = GGN）により統括されています。「地質遺産」は“geoheritage”の訳語ですが、地質だけでなく地球科学全般を含めた広義の解釈で「大地の遺産」とも訳されていて、ジオパークはいわば「地質的色彩の強いエコミュージアム」といえます。

このGGNには、2010年10月現在、25カ国77地域が加盟していて、日本からも洞爺湖有珠山、糸魚川（新潟県）、島原半島（長崎県）、山陰海岸（京都府・兵庫県・鳥取県）の四つのジオパークが加盟を果たしています。また、GGNの国内組織として09年5月に設立されたのが日本ジオパークネットワーク（Japanese Geoparks Network = JGN）です。四つの世界ジオパーク、10の日本ジオパーク、16の準会員・オブザーバーにより構成され、それぞれがジオパークをまちづくりや地域振興に結びつけようと活発な活動を続けています。



日本ジオパークネットワークのメンバー www.geopark.jp/

様似町・アポイ岳の概観

様似町は、北海道の背骨・日高山脈の南西に位置しています。人口は約5,200人で、昆布採取やさげます定置網漁などの沿岸漁業を主体としていて、歴史の浅い北海道のなかでは比較的早くから開けた地域です。町内には、江戸幕府が建立した「蝦夷三官寺」の一つである等澗院とうじゆいんがあり（他に有珠の善光寺と厚岸の国泰寺）、その住職記は蝦夷地開拓の歴史を語る貴重な史料であるとして、国の重要文化財に指定されています。

アポイ岳は標高約810mの山で、海岸線からはわずかに4km。その山体は、沖合での暖流と寒流のぶつかりにより発生する海霧によく覆われます。アポイの語源は、アイヌ語の「アペ-オイ-ヌプリ」で、直訳すると「火の多い山」となります。「火が多い」となれば、あるいは火山を連想されるかもしれませんが、そうではありません。昔、アイヌの人々の食料として重要であった鹿が突然見られなくなったため、彼らが日々仰ぎ見ている山の頂に祭壇を設け大火をたき、その再来をカムイ（神）に祈ったという伝説に由来するのだそうです。しかし、火山ではなくとも、ここは変動帯としての日本列島の成り立ちを火山とは一味違った視点で見ることのできるユニークな場所でもあります。

アポイ岳は、新生代中新世後期（約1,300万年前）に東側の北米プレートが西側のユーラシアプレートに乗り上げてできた日高山脈とともに、地下50～60km深部の上部マントルから持ち上げられたかんらん岩でできています。「幌満かんらん岩（Horoman Peridotite）」と呼ばれ、露出範囲はアポイ岳を中心に東西約8km、南北約10kmに及びますが、その学術的価値は単に規模ではなく質にあるといわれています。



様似市街とアポイ山塊（右ピークがアポイ岳）

マントル由来のかんらん岩は、地表に現れるとき、水分と反応して蛇紋岩に変質することが多いのですが、アポイ岳のそれは地下深くの上部マントルにあった鉱物がそのままの組織や化学組成を残しているという「新鮮さ」が学術的に極めて貴重であるとされます。現に、アポイ岳のかんらん岩を見ると、表面は風化により赤茶けているものの、破碎・破断すると青緑色が顔を出します。オリーブ色のかんらん石を主体に、エメラルドグリーン（尖晶石）の単斜輝石、濃褐色の斜方輝石、黒色のスピネル（尖晶石）がちりばめられた姿は、とても美しく一種幻想的でもあります。

また、地元ではかんらん岩を、地質学的価値よりもむしろ別の側面での価値にその意義を感じています。それは植生への影響です。アポイ岳は810mという低い標高にもかかわらず、80種以上の高山植物、約20種の固有植物が生育するなど貴重な植生を有していて、1952年にはこの群落が国の特別天然記念物に指定されています。北海道という寒冷地であっても、1,000m以下の山に多くの、しかも固有の高山植物が生育しているのは、前述の気候的要因に加え足元にある超塩基性岩のかんらん岩が大きく影響しているといわれています。氷河期の寒冷植物が温暖化により寒冷な高山に逃げ込むなか、アポイ岳では海霧による低温化とかんらん岩が及ぼす植物の生理機能への影響が宝石箱ともいべき自然を育んできたのです。

アポイ岳には、この花々を求めて毎年多くの愛好家が訪れます。この辺りは、積雪が少ないこともあり、日本で最も早く（5月から）、また最も長く（10月まで）いろいろな花々を見ることができ、しかも子どもからお年寄りまで誰でも気軽に登ることのできる親しみやすさがその人気を支えています。



絶滅が危惧されるヒダカソウ（アポイ岳固有種）

JGN加盟の経緯

アポイ岳ジオパークは2008年12月に、他の6地域とともに日本で初めて認定されたジオパークです。

アポイ岳周辺は、国内最大の広さを誇る日高山脈襟裳国定公園（1981年）の一区画ですが、様似町が高山植物の保護活動やジオパークに取り組む契機となったのは1990年代です。92年、独立館としてオープンした図書館が、「地域に根ざした図書館」を目指そうと、地質や自然を題材にした野外図書館を実施したり、町教育委員会がエコミュージアムの考え方を取り入れてさまざまな自然史系学習会を開催するようになると、それまでアポイを単なる観光名勝としてしかとらえなかった住民の間でも地域環境を見直す意識が徐々に広がっていきました。

こうしたなか、96・97年にアポイ岳固有種の高山植物・ヒダカソウが大量に盗掘されるという事件が発生しました。それまでも登山者や愛好家が花を持ち帰る行為は見受けられていましたが、100株以上という大量の盗掘が確認されたのは初めてでした。このことを契機に、北海道や様似町などの関係機関で構成する「アポイ岳保全対策協議会」と住民有志による「アポイ岳ファンクラブ」が発足し、高山植物の盗掘防止キャンペーンやパトロール、踏み荒しを防ぐ登山道整備などの保護活動が官民一体となって行われました。特に、アポイ岳ファンクラブの活動は「アポイ方式」と呼ばれ、官民連携による自然保護活動の成功例として高く評価されています。

一寒村である様似町には、もちろん大学などはありません。しかし、様似町には、アポイ岳を中心とした豊かで貴重な自然があるため、毎年全国各地から多くの大学が調査研究に訪れます。町では、こうした研究者とコンタクトを重ねることで、自分たちがいかに貴重な自然環境に身を置いているかを再認識する学習会を行ってきました。特に、地元で「石屋さん」と呼ばれる地質研究者（一方、植物研究者を「花屋さん」と呼ぶ）との交流は、97年にアポイ岳の麓に開設した

「アポイ岳調査研究支援センター」によりさらに活発となり、研究者による国際会議が様似町で開催されるまでになりました。様似町がアポイ岳ジオパークとして、新たなステップを踏み出すこととなったのも、こうした長年にわたる研究者との交流を通じた自然教育への取組みが実を結んだものといえます。

アポイ岳ジオパークの取組み

アポイ岳ジオパークは、アポイ岳だけではなく様似町全体をそのエリアとし、以下の3つのテーマを掲げて教育とジオツーリズムを展開することとしています。

- テーマA：かんらん岩から大地の変動を学ぶ
- テーマB：アポイ岳の高山植物から自然環境を学ぶ
- テーマC：歴史から自然と人間社会の共生を学ぶ

単に地形地質だけでなく、それと密接に関連する自然環境及びそこに暮らす住民の生活や歴史など、いわば「様似」を丸ごと学び楽しんでもらうことを企図していて、このテーマに基づき五つの小エリアと33のジオサイトを設定しています。これまでに、「地形地質探索ツアー」「バスで巡ろうジオサイト」などの地質巡検ツアーを行ったほか、「磯の観察会」「高山植物シンポジウム」「歴史講演会」など幅広い分野での学習会を通じて、住民のジオパーク理解を促しています。ジオパークをアピールするためのパンフレットや看板、のぼりなども作成し各所に配置していますが、そこで活躍しているのはアポイ岳ジオパークのロゴマークとキャラクターです。特にキャラクターは一般的認知度の低い地質に少しでも親しみを持ってもらおうと作成したもので、趣旨に反しない限り、誰でも無料で使用できます。これまでに地元企業のバスやタンクローリーの車体、菓子折、米袋にも使われたり、クリ



ジオパークキャラクターのカンランくん、アポイちゃん

アフォルダーや携帯ストラップなどの新たな土産品も登場しています。

ジオパークでは、インタープリター（自然解説者）としてのガイドが重要視されています。様似町では近年、前述のアポイ岳ファンクラブのメンバーがアポイ岳のフラワーガイドとして登山客の案内を有料で行っていますが、それも登山ツアーを企画する旅行会社の依頼により年数回請け負う程度のものであり、質・量とも十分とはいえません。何より、花だけではなく地質や歴史文化をも含めた「アポイ岳ジオパークとしてのガイド」はまだ整備されていないのが現状です。このため、今年は「ふるさとジオ塾」と題した半年間の講座を開いて、ガイドの人材発掘を進めることとしています。

アポイ岳ジオパークの課題

様似町のジオパーク活動は日も浅く、抱える課題は少なくありません。なかでも、住民の機運醸成は早急かつ着実な対応が求められるものの一つです。アポイ岳ジオパークでは、町や産業団体、観光協会、民間企業の代表者などで構成される「様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会」を組織していますが、地域住民がその活動に主体的に加わるような、いわゆる「友の会」的な組織がないのが現状です。そのなかで、アポイ岳ファンクラブはアポイ岳の保護活動だけでなく、ジオパークの学習会などにも積極的に参加している住民組織です。しかし、ファンクラブはあくまでもアポイ岳の自然を保護することをその目的としていて、町全体を包含するジオパークの活動には一定の距離感があるのも事実です。ファンクラブの活動を発展させるのか、新たな会の設立を目指すのかは今後の行方次第です



ふるさとのジオを学び楽しむ、ふるさとジオ塾

が、いずれにしてもジオパーク活動の担い手となるべき住民参加の枠組みを構築することが求められています。

また、住民の機運醸成が課題に挙がる背景には、ジオパークが地域経済にどのような効果をもたらすのかということについての具体像が見えないことがあります。様似町の産業に占める観光の位置は決して高いものではありません。「ジオパークで観光振興を」「ジオパークで地域活性化を」と叫んでみても、今の段階では説得力ある説明にはなりません。しかし、では、様似町の観光（地域間交流）に可能性がないのかといえ、決してそうではないと考えます。様似を丸ごと学び楽しむというアポイ岳ジオパークの考え方に立てば、基幹産業である漁業も、地理的条件によって生まれた地域の歴史も、先住民族アイヌの伝説も、地形を含めた自然環境とともに、地域のストーリーとして十分に見ごたえ聞きごたえ触りごたえのある資源になり得るものと考えます。

*

私たちが暮らす大地には、雄大な山や谷、美しい丘や川などの多様な景観が広がっています。しかし、それらの背後に地球の長い営みがあることを意識する人は、少ないのではないのでしょうか。ジオパークは、身近な地形や地質をガイドのやさしい説明を聞きながら歩き、大地の成り立ちや面白さを楽しむ大地の公園です。しかも、ジオパークは、単に地形や地質だけでなく、それによって影響を受けるわれわれ人間を含んだ生態系も、楽しむ重要な要素としているのです。

つまり、それぞれの地域にある山河やそこに住む人々の暮らしもすべて「ジオ」であり、それらを学び楽しむ素材として系統立て、地域資源として活用する取組みが、「ジオパークによるまちづくり」なのです。

（様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局 原田 卓見）